詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

柏餅のせて九谷の深緑
志木市　谷村　康志

△評▽九谷焼は紫や黄などの色づかいに特徴がある。かしわ餅の白と葉の緑が加わり、皿の深緑が際立って見えたのだろう。

信号が捌く人波夏近し
横浜市　菅沼　葉二

△評▽信号と共に人の動きがさっと変わるのがすがすがしい。信号がさばくと見たのが巧み。

春雨にはや庭石の濡れてをり
津山市　森下　弘

白といふことに徹して白牡丹
羽生市　小菅　純一

新緑や子のぶら下がる父の腕
倉敷市　中路　修平

みどりの日残る昭和の松林
羽生市　今成　公江

遠ぐより母の呼ぶ声桐の花
相模原市　はやし　央

牡丹の重たさうなる深紅かな
奈良市　高尾山　昭

麦秋やうねりて川の海に入り
土岐市　水野　雅子

新緑の風とくぐりし鳥居かな
川口市　高橋さだ子

小川　軽舟 選

大空に桐咲いてをり県境
東京　永井　和子

△評▽県境の峠だろうか。大空に咲いているという表現が、仰ぎ見るほどのキリの大木のみごとな花盛りを想像させる。

春望や駿馬の上がり三ハロン
千葉市　石野　勤

△評▽広い競馬場は今まさに春望。ムチの入ったサラブレッドの末脚が地面をとどろかせる。

離陸機の影の大きく潮干潟
東京　関口　昭男

草笛や母の帰りを待つ時間
香川　川本　一葉

空を切る影を田水につばくらめ
明石市　木村憲一郎

写経一巻吹き抜ける若葉風
大阪市　小爪　碧

ふつふつとカレーの鍋や昭和の日
藤沢市　佐藤　一夫

狂っているのは世界の方だ万愚節
伊丹市　噂野アンドゥー

取り戻すべきもの数多遅桜
米子市　長田　遼平

どこにでもあるまんぢゆうや花筵
加古川市　石村　まい

西村　和子 選

花屑を肩に巡査の昼休み
志木市　谷村　康志

△評▽「落花」「花びら」と美しく描写せず、あえて季語を「花屑」としたことで、午前中働いた肩であることが伝わる。

惜春や履かず仕舞のハイヒール
春日市　林田　久子

△評▽80代の作者にとって、人生の春を惜しむ思いと愛着も重なっていることだろう。

船室のスリッパに替へ春の宵
岸和田市　妙中　正

買ふあてのなき骨董を見て日永
岡山市　和田　大義

浜大根咲いて大島指呼の内
和歌山市　花谷　康道

下校児の見えて隠れて麦の秋
宇都宮市　手塚　康雄

トンネルを出れば卯波の和賀江島
横須賀市　浅井　耕作

新学期八頭身の転校生
横浜市　菅沼　葉二

若葉雨止んで山から湯気が立ち
下関市　礒部　秀幸

風光る新米教師愚直なり
奈良市　浦城　亮祐

井上　康明 選

ありあまるもののごとくに蟻出づる
東京　望月　清彦

△評▽「ありあまる」から、限りなくアリが湧き出す光景が見える。無数の小さなアリが動いている不気味な感じが伝わってくる。

水門にザリガニ釣りの母と子と
東京　野上　卓

△評▽炎天下、小学生の兄妹と若い母親が、木の枝の簡易なさおを下げ、水門の水をのぞき込む。

漁火は沖へ八十八夜かな
神戸市　田代　真一

わが蛹夏蝶となり飛び立てり
直方市　岩野　伸子

山際に一握の雲夏きたる
甲府市　清水　輝子

松の芯練習船の沖を指し
鎌ケ谷市　佐藤　紀子

またたくまつばめつばくろつばくらめ
小平市　中澤　清

すぐそこに島二つあり春の海
唐津市　梶山　守

空海の元の名は真魚麦の秋
高松市　島田　章平

卯の花や戦の終はり未だ見えず
豊田市　松本　文

調べの鼓動

選と作句

星野高士

日本の伝統的な俳句は昨今、国内にとどまらず世界へも広がっている。

これは他の文学と違い、短い音で構成されていることも一つであるが、四季折々の季題（季語）が存在していることもその要因と言ってよいのであろう。私も外国へ行く機会があり、各国で句会を開き意見交換をしてきたが、日本の俳句の潔さにも憧れているのであった。

先日、大阪・関西万博の賓客として来日した元ベルギー首相で初代EU（欧州連合）大統領のヘルマン・ファンロンパウ氏と、彼の好きな場所である千葉・御宿で句会を共にすることがあった。

俳人の彼はベルギーのフランドル語と英語の対訳で書かれた句集も出しており、日本政府から旭日大綬章を贈られている。今回は2人で約70句集まった作品を選句して特選10句ずつを選んだ。俳句を作るということと選句をするということは同じようであるが、そこに個性も出てくるので緊迫する発表でもあった。

彼の10句選のうちに7句が私の選と重なり、なんと2人が特選に推した俳句があった。△大仏の背より広がる暑さかな　志保子▽という作品であり、2人それぞれ講評をした。目では見えない「暑さ」という季題（季語）の広がりを大仏の背中に見たという大きな発見があったと意見も一致していた。

俳句ユネスコ（国連教育科学文化機関）無形文化遺産登録推進協議会の名誉顧問を務めるファンロンパウ氏の来日は、登録実現に向けての強力な後押しになったことは間違いないであろう。

（ほしの・たかし＝俳人）